

新刊紹介

○Whitbeck and Finch : Economic Geography.

英文の經濟地理書は中々多し。その中でもイギリスの Chisholm : Handbook of Commercial Geography (1922, 3rd Edition) やアメリカの Smith : Industrial and Commercial Geography (Revised 1922), Huntington and Williams : Business Geography (1922) 等は定評ある良書であるが、茲に紹介するものも其の一に數へる事が出来る。著者等はアメリカ合衆國ウイスコンシン大學の地理學教授である。本書は本年その初版を出したもので九吋×六吋、五五八頁の手頃のものである。緒論に於ては經濟地理學の意義について論じ、第一篇にはアメリカ合衆國及びカナダについて約二百六十頁即ち本書の半を費して居る。之は著者がアメリカのカレッヂの學生參考用と一般米人の爲に書いたことから来る當然の結果である。合衆國には主なる世界的商品が存在して居るから、之を廣く世界的立場から論じ、合衆國に産せざる生糸・ゴム・コーヒー・茶の如きは他の國にて同様に取扱ひ、通論を特に設けないのである。又カナダ南部は合衆國と經濟事情がほぼ同一であるから、この二者を一帶として取扱ひ最後の一章にカナダ全國の經濟地理概要を説いて居る。第二篇には世界の他の諸國について述べて居るが、各大陸内の自然地

理的區分よりも政治的區分の方が經濟地理としては適當であるとの考で、簡單ではあるが要領よく主なる諸國について取扱つて居る。各章及卷末には引用書目が示されて居るが、各官廳其の他有力な資料が参照されて居ることが分る。殊に合衆國の分に著しいのは云ふ途もない。經濟地理の陥り易い欠點一單なる事實の記載一を避けんことを期し、努めて自然と人類の經濟的活動との關係を明かにせんとして居ることは本書の最も價値ある點として推薦することが出来る。そして各國の地勢及氣候の一般的叙述は、讀者に豫備知識あるものと見做して之を省略し直ちに經濟事項を促へ、之を自然との關係を明かにする様にして居る。卷中の統計圖・地圖・寫眞并に卷末の統計表及索引何れも概して適當である。(賣價丸善九圓二十五錢)(西田)

○Mount Everest ; the reconnaissance 1921. By Howard-Bury.

英國のアルプス俱樂部と倫敦地學協會の後援の下に十萬磅の資財を募つて四年來世界最高峯たるエブレスト山の征服を計畫し、今尙ほ絶頂には攀ち上り得ないが、本年も引續いて登山中で今年成功せずとも一兩年中には負けじ魂の英國人の脚下に此の最秀點を踏みつけるのは略ほ想像に難くない。最近到着した本書は探検隊長たるホワード・ベリー中佐の其第一年事業經過を一九二二年の豫察と題して、面白い旅行記體の文章で報告したものである。

エブレスト峰は西藏側から望めば群山中に挺出した山嶽の

王たる條を呈するも、印度の側からはより低い前面の山嶽に妨げられて雄姿を十分に區別すること出来ぬ。従つて一八四九年有名なフリーカーがヒマラヤ探検の頃にはカンチンヂェンガ山が最高峯と信ぜられてゐた。恰も此の年に印度測地部員カネバル諸峯の高度と位置とを測定して、之を計算するに當つて第十五峯と假に呼んだものが二九、〇〇二呎あることを發見して、部長アンドリッ・チーフ Andrew Waugh が土人の名稱を調べても見付からぬので前任部長の名を取つてエプエレスト山と命名したのである。従つて西藏側ではチモルン Chomolungmo 山嶽の母神と呼んでゐる。此の外にゴリリサンカルといふ高峯がエプエレストと混同されて飄逸の地理書などには嘗て世界最高峯をゴリリサンカルと呼んでたこともある。最近の計算によれば處々から觀測した結果の平均二九、一四一呎となつた。

第一回の探検はチユンピ谷からタララ峠を越えてバムツオに出で西に向つてアルンツオの上流に出た。此の谷はエプエレストの東側を横断してガンヂスに入るもので、此の谷はツアンボと一列の山脈を隔てエプエレストは分水界の南に在る。此の一行は二三、〇〇〇呎のチヤンラまで達した。エプエレスト峯は大きなピラミッド形の山で西、東南、東北の三つの稜があつてチヤンラから東北の稜角に沿ふて登れる見込をつけた。

本書には數葉のエプエレストの雄姿を示す寫眞版を含む挿畫二十枚と地形圖二葉地質圖一葉を添え、地質圖は印度地質調査所員ヘロン氏の手に成り初めて此の附近の地質を明にしたので

ある。此の報は本誌に別に掲げる替である。本書が出て初めて世界最高峯たるエプエレストの眞面目が世界に紹介されたのは實に愉快で炎熱の今日之を緋いて氷雪の寒氣府に迫るを覺える。(小川)

質疑應答

問 左の地及び諸項につきて知る所を問ふ
答 一、閩江、

閩江は福建の大河なり、上流三あり、一を建溪と云ひ省の北部建寧府内より出で一を富屯溪と云ひ光澤縣より發し、一を沙溪と云ひ西南寧化縣より來る、沙溪延平府に入り沙溪口にて富屯溪に會し延平府城と劍浦との間に建溪を北より合し、是より水量多けれども流緩ならず岩礁急灘少からず、閩清縣に至りて水始めて險を出づ福州府城にて南臺島にて一派に分れ北を白臺江と云ひ、南を陶江といふ、二流馬尾にて相會し閩安門、金牌門を経て海に入る、福州府城は江口より四十四里に位す府城下流は水深淺く海洋航行の大船は馬尾の羅星塔鋪地に止まる、馬尾上流十一里福州府迄は、七呎以内の吃水を用ふべく馬尾下流は河幅狭き所三分の一里二十四呎半吃水の船は昇潮を待つて溯るべく大湖には二十六呎半吃水も繪可なり、福州はかくの如き位置にあるを以て省内第一の水運の中心となり府城の洪山橋より上流水口鎮に至る六十里は小蒸氣の往來あり、民船に江西船